

*Japanisch-Deutsche
Gesellschaft Kitakyushu*

11.
Juli
2015
Nr. **28**



北九州日独協会

北九州日独協会 会報 28号

2015年7月11日発行

発行者 北九州日独協会
〒804-0021 北九州市戸畑区一丁目4-33
一般社団法人 西日本工業倶楽部内
TEL 093-871-1032
FAX 093-871-1071
Email hisatomi@nkc.or.jp

印刷所 (有)青雲印刷
北九州市小倉北区清水1-8-7
TEL 093-561-3128



ベルリンの森鷗外記念館 30周年記念式典へ

出口 隆

ベルリンからの招請状

昨年の7月初旬のこと、ベルリン-フンボルト大学森鷗外記念館館長のハラルト-ザロモン博士から、書翰が届いた。同大学の設置している森鷗外記念館が、開館30周年を迎えるので、北九州森鷗外記念会（以下「記念会」）会長を、10月15日開催予定の記念式典に「招待させて頂ければ大変光栄に…」という式典参加打診であった。



フンボルト大学本部、柵の右側青幕は記念式典の予告

うれしいご案内であったが、にわかに「参りましょう」とはなれなかった。振り返ってみると、小生これまで、海外独り旅行はあまりなく、いつも添乗員や同行者・通訳・随行者などに助けてもらっていたのである。独り旅は重たい。しかも、当時広がっていたエボラ出血熱やテロは怖いし、かなりの日時と体力が必要だし…。

迷っていてもしょうが無いので、記念会の理事会を開き、経過を説明し出欠について話した。意外にも、北九州の記念会としては是非参加すべしと意見一致。その上、一緒にベルリンへ行きましょうという理事が3人も現れた。事態は一変。

考えてみると、みんながベルリンへ行こう、という雰囲気になったのには幾つかの伏線があった。

鷗外が結ぶドイツとの縁

ご記憶の方は多いと思うが、2011年9月3日、北九州日独協会と記念会の共催で、“ドイツビール「うたかたの記」を飲む会”を開いた。あのビールの名称「うたかたの記」は、有名な森鷗外の小説の題名であり、生産地はバイエルン州のアウエルバッハという町。日独交流150年を記念して醸造されたビールである。このビールの情報をもたらしてくれた



式典会場でヴォンデ副館長さんと再会

のが、ベルリン森鷗外記念館の副館長ベアーテ-ヴォンデさん。お陰で、日独協会と記念会が共同で輸入することが出来、あの賑やかなパーティとなった。

この会の直後、前記2団体に九州フィンランド協会を含め、3団体共催で「ドイツ・フィンランド旅行」に出かけた。最初の目的地は、森鷗外記念館があり、鷗外が滞在し勉強したベルリンであった。

現地では先ず、記念館副館長のヴォンデさんから、『舞姫』の舞台アルト-ベルリンを中心に、『独逸日記』でおなじみの鷗外ゆかりの地を案内していただいた。近代的な建築群の中に、鷗外が留学した時代の香りを感じることも出来た。昼食を挟んで、ヴォンデさんから、ベルリン森鷗外記念館の歴史や課題をお話しして頂いた。その中で、まだ東ベルリンといわれて東西が対立していた時代に、日本の軍人のために記念館をつくるというアイディアは、極めて異常であった。しかし、フンボルト大学の総長や日本文学研究者などの努力で、鷗外到着100周年（1984）に開館することができた。

フンボルト大学の創立関係者であるアレキサンダー-フォン-フンボルトの住んだアパートや部屋が残っているのに、大学はこれをフンボルト記念館にする資金がない。

ロバート-コッホ記念館は、支援者がなくなり廃館。

「この記念館で頑張っでここで仕事をしているのが実は不思議です。あり得ない。」と言われたのが印象的であった。そのときのお話を聞いた一同は、相当厳しい環境の中で、大学が外国人文学者のための記念館を運営していて、大変なご苦労をしているであろうとの思を新たにしたものである。

その後も、仄聞するところによると、ドイツでは日本語を学びたい学生が少なくなってしまったとか。

そんな状況があつて、理事の皆さんは、記念館の運営にあたられているフンボルト大学の関係者に対する感謝の念を具体的に表そうということになったのである。早速、記念館のザロモン館長、ヴォンデ副館長に連絡したところ、濱田源一郎常任理事・宮崎貴子理事・安高洋一理事そして小生へと個別にご案内をいただいた。

讃えられた記念館の活動

30周年記念式典があつたのは、美しい街路で名高いウンター-デン-リンデンに面した



フンボルト大学の公式メダルを着けた総長・オルベルツ教授

ベルリン-フンボルト大学本部の小講堂。大学は、1810年、ヴィルヘルム-フォン-フンボルトにより、フリードリッヒ-ヴィルヘルム大学として創立。第二次世界大戦後そして東西統一後、名称を変更して現在に至る。陸軍軍医森林太郎は、この大学の細菌学の教授であるロバート-コッホに師事し、1年余にわたって細菌学の実験、現地で下水道施設の視察など衛生学の研鑽に励んだ。

ただ、ヴォンデさんの調査によると、大学に在籍してはなかったようだとのこと。



祝辞を述べる筆者

会場に入ると、邦人関係者としては、森家代表としてドイツ在住の森ゆりこさん（鷗外の玄孫・医師）、在ドイツ日本国大使館宮下孝之公使をはじめ、鷗外生誕の地津和野からは下森博之町

長、鷗外の生活拠点観潮楼のあった東京文京区からは成澤廣修区長と東京森鷗外記念会の高橋修司会長代理などが出席していた。第12師団軍医部長としての任地小倉からは北九州市長代理の今川英子市立文学館館長、そして記念会の我々4人が参加した。

式典は、弦楽器による二重奏とザロモン館長の開会の辞で始まり、多くの方のお祝いの挨拶があった。小生も、市民有志の会の代表として、大学のご努力に敬意を表し、これからは鷗外の研究・啓発にとどまらず日独文化交流の象徴的存在として活動を続けられんことを要請してご挨拶とした。続いて、立教大学の前田良三教授から「文化の境界を越えた



森ゆりこさんと名刺交換をする筆者

知識人鷗外—現代におけるそのアクチュアリティ」と題して基調講演。間奏を挟んで、ヴォンデ副館長による熱のこもった記念館創設の歴史を中心に回顧があり、最後は、ザロモン館長の力強い展望で締め括られた。

参加者はおよそ100人。かなり長時間休みがなかったが、冒頭・中間に弦楽器による二重奏がはいる、優雅に進行した。

レセプションで交流

式典が終了し、早速ステージ下でザロモン博士をはじめ宮下公使などと挨拶を交わしていて、ふと横を見ると、もうワイン・グラスを片手にしている人がいる。驚いたことに、



森千里教授と歓談する筆者

いつの間にか大学と日本大使館共催のレセプションが始まっていたのである。我々の懇親会ではおなじみの主催者挨拶、来賓挨拶、乾杯など一切なし。式典が終わると、適宜ホワイエに出て飲み・食べ始めたのであろう。まさに、所変われば…である。

ホワイエに出て細巻き寿司をつまみワインを飲んでいたら、昨年、北九州に来てくださった森千里

(鷗外の曾孫・千葉大学大学院) 教授とばったり。ドイツにはかなり頻繁にこられているとのこと。そういえば、ベルリンに入る前、ミュンヘンでガイドさんから森千里教授の活動を聞いた。北九州にはまた行きましょうと関心を寄せていただいた。森ゆりこさんから、「祖母が北九州の方によろしく」といわれたように聞こえたが一瞬理解できず。思い起こせば、森里子(鷗外の孫真章氏の夫人、ゆりこさんの祖母)さんから、前記ドイツ記念ビール「うたかたの記」について、記念会に問い合わせがあり、濱田常任理事がご自身の分をお送りしたこと、そして結構なお菓子をいただいたことがあった。またまたビールが繋ぐ縁でした。ヴォンデさんは、大忙し。次回ベルリンに来てくれたらコッホの研究所の跡を案内しましょう、との約束をいただいた。記念会の皆さんも、グラス片手に色々な方と交流を深めていた。

街は光の祭典

和やかなレセプション会場から退出したら、前庭は市民・観光客で一杯。大学の本部棟壁面がプロジェクションマッピングによる幻想的な照明で輝いていた。人並みをかき分けるようにしてウンター-デン-リンデンに出ると、街は更けゆく秋を惜しみ、光の祭典を楽しんでお祭りムード。



フンボルト大学正面の照明画像

美しい光の下で、森鷗外を軸とした日独文化交流の歴史に浸り、ベルリン森鷗外記念館の未来に夢をはせた。

(北九州森鷗外記念会会長)



森鷗外の足跡を訪ねて

—ミュンヘン・ライプチヒ・ベルリン—

宮崎 貴子

1 はじめに

森鷗外は、1884年から約4年のドイツ留学中に、ベルリン、ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘンに滞在している。今回は、ベルリンの森鷗外記念館30周年記念式典の参加に併せて、ミュンヘン、ライプチヒ、も訪ねた。

鷗外の『独逸日記』や、ガイドブックなどを頼りに事前準備をしたが、ミュンヘンについてはW・シャモニ著「森鷗外のミュンヘン地誌」（『鷗外28号』森鷗外記念会1981年）という資料を出発直前に見つけ、ずいぶん助かった。ライプチヒについては、現地の日本人ガイドに大いに助けられた。行程は、2014年10月9日羽田からミュンヘンへ直行、3泊。鉄道でライプチヒへ、2泊。ベルリンへ鉄道で行き2泊10月17日帰国。



ベルリン・森鷗外記念館にて
左から出口会長、安高氏、宮崎、濱田氏

2 ミュンヘン

鷗外は、ミュンヘンに1886（明治19）年3月8日から翌年の4月15日まで滞在し衛生学をペッテンコッフエルに学んでいる。日記に到着後「独帝客館に投ず」と書かれたホテル・ドイッチャ・カイザーを探した。駅そばのアーケードにホテルの小さな看板を発見したが、間口は狭く商業施設に囲まれ、鷗外時代の面影を感じることはできなかった。

下宿はHeustrasse16で「大学衛生部と相對す」とある。現在は、パウル・ハイゼ通り



ミュンヘン 下宿のあった付近の建物

と名前が変り、ペッテンコッフエル通りと交差した角付近の下宿跡を訪ねた。6階建ての建物が並び1階は店舗、上階は医者事務所や住居などが見られた。大学衛生部は、ゲーテ通りとリントヴルム通りに挟まれた三角地帯に昔のままあった。下宿の正面は当時ペッテンコッフエルの研究所だったが、現在は、事務所となっているようだ。

鷗外が出かけた駅近くのカフェOrient と Finsterwalderは残っていると、シャモニは書



パウルハイゼ通りの道路表示

いているが、現在はすっかり再開発されカフェの雰囲気はなかった。

鷗外が友人と訪ねた「宮廷醸家」ホッフブロイハウスは、16世紀に設立され旧市街の中にある。昼間は中庭のある静かなレストランだったが、夕食時に行くと1階から3階まで満席で、利用できなかった。バイエルン王のための宮廷醸造所を、鷗外が「宮廷醸家」と記したのは名訳だと思った。

ミュンヘンは、旧市街の中心にレジデンツ（宮殿）があり、その隣にルートヴィッヒ二世がワグ

ナーの歌劇を見た劇場。鷗外滞在中にルートヴィッヒ二世が、ミュンヘン近郊のヴェルム湖で溺死したと日記に長い記述がある（M19/6/13日記）。その後、鷗外は何度もヴェルム湖を訪ねているが、我々は時間不足で訪問できず残念。当時、王死亡の号外が出たので鷗外はそれを見たのだろう、とガイドは説明した。白い外壁のミカエル教会には、ルートヴィッヒ二世の遺体が祀ってある。死因が諸説あるため、最近になって解明をしようという意見が出たが、ヴィッテルスバッハ家の子孫がそれに反対をしたという。昼食は市役所地下のラーツケラーでとったが、郷土料理はおいしい。しかし、日本人には量が多すぎる。

夕食は、オクトーバーフェストに参加できる六大ビール醸造所の一つである、アウグスティーナを紹介された。南ドイツでは、アイスバインよりもこってりとした、シュバイネブラウテンやシュヴァインスハクセといったものが多いということだった。名物の白ソーセージ、ザワークラウト、スープなどを注文し初めて食べる本場のソーセージの柔らかい口当たりに感激した。

3 ライプチヒ

ミュンヘンから鉄道で、約5時間半。

この街は、旧東独で戦災復興が遅れていたが、古い街並を復元した街づくりがされていた。道路などは驚くほど変わってなくて、古都を感じられた。

鷗外の下宿は、「東北隅タルThalstrasseで、大学の衛生部はリイビヒ街。朝ヨハネス



ライプチヒ、タル街の下宿跡、左奥がヨハネス教会広場

ス寺の鐘が聞こえる」とあるのを手掛かりに探した。タル通りはそのまま残っていた。ヨハネス教会は戦災で失われ、現在、周辺は広場と楽器博物館となっている。博物館からほぼ直角に南へ下がるのがタル通りで、その突き当たりがリイビヒ通り、ガイドは「リービック」と発音していた。タル通りの下宿があったと思われる場所に庭付一戸建ての住宅があった。リイビヒ通りの両側は全て、ライプチヒ大学医学部の施設や病院が並んでいた。鷗外が食事をしたフォーゲル家は、番地

で確認することはできなかった。番地がところどころ飛んでいたのが建物建て替えられたようだ。しかし、大学街は昔と変わらない風景だろう。

井上哲次郎と『ファウスト』の訳について話をした(M18/12/27日記)アウアーバッハス・ケラーで食事をした。メードラー・パサージュに入ってすぐの地下酒場で、ファウストの銅像が入りに建っている。2009年に「森鷗外アウアーバッハス・ケラー訪問時の回想」という大きな壁画が掲げられた。その前で食事をしたいと伝え、撮影をすることができた。食事は少なく注文したつもりだったが、また多すぎて運搬用のワゴンに食器を載せたまま置いていかれた。パサージュを出ると、前の広場に大きなゲーテ像があり、奥にライトアップされた白亜の旧交易会館が輝いていた。

鷗外が、演奏会や送迎に出かけた「バイエルン停車場」(M18/1/29日記)は、市の南部にあり、現在は線路や駅舎を残したままレストランとなり、夕食をとることができた。また、



アウアーバッハス・ケラー入口
ファウスト像前の出口氏と濱田氏

送別会などで訪れた郊外のゴオリス(M18/6/27日記)で音楽会などを楽しんでいる。今は住宅地の中になり、小宮殿内部は工事中で見学はできなかったが、庭園を見ながらお茶をいただいた。この日の日記に、「半リットルのカップで、25杯飲む人がいるが、自分はわずか3杯を飲んだ」と書かれている。

アイススケートを見たという白鳥池(M18/1/29日記)は、市内の中心地、オペラハウスの裏手の公園の中にあり、鴨が泳いでいた。トーマス教会は、18世紀にバッハが仕事をしたところで、教会のそばに大きなバッハ像があった。鷗外の下宿近くのシューマンが住んだ家は、音楽と体育を重視した私立学校となっていた。また、その近くに音楽出版のペーター社、グリーク記念館などがあり、音楽愛好者の聖地となっていた。



「森鷗外アウアーバッハス・ケラー訪問時の回想」

メンデルスゾーンが12年間住んだ家は資料館となり、内部をすべて見学することができた。ゲヴァントハウスのホールと歌劇場は大きな広場を挟んで向かい合い、その間の左手正面にライプチヒ大学の校舎がある。東独時代はカール・マルクス大学と改名され、教会は破壊され、統一後に教会の形をしたガラスの校舎が新築された。その横に出版都市を象徴したブック型の高い校舎がある。メルケル

首相もこの大学の出身。

ドイツ最古のコーヒー店といわれるカフェ・バウムには、シューマン夫妻の定席が残されているが、私たちもそばの席で昼食をした。また、シラーが「歓喜の歌」を書いた農家は、今は住宅地の中にぽつんとある。ライプチヒは、学術、音楽、出版、商業と色々な顔を持ち、往時の繁栄を物語る街で、鷗外が多方面の文化を吸収したことが理解できた。

4 ベルリン

ベルリンへは鷗外が鉄道3~4時間かかっていたところを、約1時間20分で到着した。式典前日は、森鷗外記念館（第一の下宿跡）を表敬訪問後、第二、第三の下宿跡を訪ねた。第二の下宿、クロスター街97番地には、再開発の大きな集合住宅が建っている。住宅の通路を通り抜けるとフェンスで囲んだ児童公園。横に地下駐車場入り口があり、ヴォンデ



第三の下宿跡、正面がハッケッシャー・マルクト通り、右手がグローセ・プレジデンテン通り

副館長の「地下駐車場のあたり」というのが納得できた。続いて北の方角へ行くと『舞姫』の舞台になったガルニゾン教会跡がある^(注)。高架をくぐるとハッケッシャー・マルクト駅の広場に出る。前方の大きな建物が第三の下宿跡で、歩いてもすぐの距離である。鷗外が帰国直前になぜ下宿を替わったのか謎だと言われている。下宿のあった建物は大きな道路に囲まれており、六草いちかさんの本を頼りに歩いて、グローセ・プレジデンテン通り10番の位置を確かめた。

5 おわりに

『鷗外文学と「独逸紀行」』（明治書院）という本を、旅行後に入手した。著者の長谷川泉・森鷗外記念会常任理事が団長で20人のツアーを組み、森鷗外記念館の開館式出席後、鷗外の足跡をたどる「独逸紀行」をしていた。日本には、文京区の図書館の中に「森鷗外記念室」しかなかった時に、東ベルリンに「記念館」が開館したことを喜んでいる。

30年後、鷗外ゆかりの地から行政代表と北九州市民が出かけたことは、記念館にとって心強く感じていただけたと思っている。今後の交流がさらに深まることだろう。

ベルリンは、まだまだ都市の“普請中”で、ウンター・デン・リンデンに面した宮殿跡など、来るたびに美しく整備されつつあった。



ベルリン ウンター・デン・リンデンの工事風景

(北九州森鷗外記念会理事)

参照 日記：森鷗外「独逸日記」ちくま文庫、(注) 六草いちか「鷗外の恋 舞姫エリスの真実」講談社